

# WIN-Global 2003 年次大会に参加して — 来年の日本開催に向けて —

WIN Japan 会員 矢納紀子

WIN (Women In Nuclear) は、原子力や放射線の仕事をする女性たちの世界的な組織である。特に女性や次世代層に、原子力や放射線利用について理解促進を図ること、および会員自身も資質向上を目指すことが活動目的である。ネットワーク強化と情報交換のため、年1回年次大会が開催されるが、今年は6月16～19日、アメリカのネバダ州ラスベガスにおいて第11回目が開催された。

参加国は16カ国、参加者約250名、そのうち開催国アメリカ以外からの参加者は55名を数え、アジア勢はその半数以上を占めた。国別では日本が最も多く、今回、WIN-Japan (WINの日本組織) メンバー16名が参加した。来年、私たちは、いよいよ年次大会を日本で開催する。今回の経験を来年に活かすため、ま

た来年の開催アピールのために、皆、意欲を持っての参加であった。

## 炎天下での ユッカマウンテン見学

初日は、使用済燃料等最終処分予定地、ユッカマウンテンの見学であった。

アメリカでは、ネバダ州ユッカマウンテン (6,584 feet) の地下300 m以深の凝灰岩中に、商業用原子力発電所から発生する使用済燃料、エネルギー省 (DOE) が所有する核兵器製造過程で生じた高レベル放射性廃棄物、兵器製造炉/研究炉および海軍の船用炉から発生する使用済燃料の3種類が処分される予定である。このツアーの企画が、本大会ラスベガス開催のきっかけである。

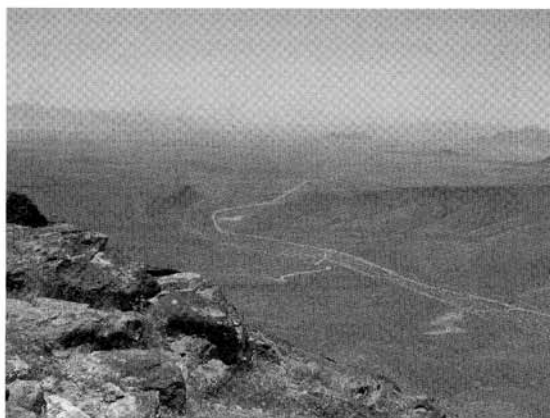
参加者は約110名、早朝、バス2

台に分乗し、出発。途中、市内のユッカマウンテンサイエンスセンターにて見学手続きを行い、そしてサイトへと向かった。

ユッカマウンテン予定地はラスベガスの北西約160 kmに位置し、周囲は核実験場や空軍基地等にまたがった国有地に位置している。サイトに入域する際に警備所があり、そこから予定地まで車で約1時間ほど、軍用地を抜けていく。車窓の撮影は一切禁止であったが、素人目には何を撮影するのがいけないのかはまったく分からない。低木の生える砂漠をドライブし、やっと処分地北側入口へ到着。入口から入って100 mくらいの位置にある横穴で、この施設の概況、また、ここの地層がいかに関与しているか等の説明を受けた。サイトは総面積4.65



ユッカマウンテン北側入口から坑内へ



ユッカマウンテン山頂から砂漠を眺める

km<sup>2</sup>、坑道の延長距離は約 69 km になるらしい。

南側入口付近で巨大な掘削機を見学後、小型バンに乗り込み、ユッカマウンテン山頂へと向かった。山頂では、この場所が 1,200 万年も変化のない地層であることや、広さ、周囲の山並等、主に地質学的な説明を受けた。でも、私の目には否応にも地平線をはるかに眺める茶褐色の広大な砂漠が飛び込んできて、広大な国有地の大きさに、ただ圧倒されるばかりであった。使用済燃料処分場やその輸送経路等の情報の扱いに神経をとがらしている日本とはまったく状況が違うのだ。

### 強冷房の中での大会開催

2日目からは大会本番！ 外は 40℃だというのに、会場内は冷房で体の芯まで冷えるほど寒い。節電、節電と心がけている日本人の感覚で見れば、ラスベガスのネオンやホテルの空調の電力消費は異常に思えてしまう。

まずはじめの総会で、カルニノ会長（前国際原子力機関（IAEA）施設安全部長）より、来年の開催地を日本にしたいこと、日本では WIN 大会のプログラムの一環として、市民参加のフォーラムが計画されてい

ることが発表された。会場からは期待を込めたざわめきが起こり、まさに次回の日本開催が承認された瞬間だった。

そして、アメリカの著名女流作家ロビン・ガーバー女史による講演を皮切りに、20 を超えるテーマ別セッションが始まった。セッションは全員参加のものと、テーマによって各自選択をするセッションとに分かれた。複数テーマのある場合は小部屋に分かれ、講演者と聴講者が身近に対話しながら進められた。参加者が研究や、技術・技能、広報などさまざまな専門分野に携わっているので、これは非常に合理的なプログラム構

## WIN-Japan, 柏崎刈羽地域で2度目の女性交流会を開催

WIN-Japan 会員 若井直子

WIN-Japan では、6月28日(土)、新潟県柏崎市において「じっくり話そう、エネルギーや原子力のこと。」と題し、女性交流会を開催した。

原子力の仕事に携わる WIN-Japan 会員と柏崎刈羽地域の女性との交流会は昨年5月に引き続き2度目。前回のフォローアップを目的として、前回の参加者が友人、知人を誘い合って集うという仕組みだ。

当日は柏崎市、刈羽村を中心に56名の女性が参加。全国から名乗りをあげた21名の WIN-Japan 会員とともに、昼食を含めて4時間の交流を行った。



シュラウド模型を使って参加者に説明

東京電力の不祥事や夏場の電力危機が取りざたされる中、交流会にはさまざまな課題があった。東電問題に対しては、東京電力の会員がおおむね現在行われているプラントの補修方法について映像を使って説明した。難しい補修方法などを実感していただくために、電力会社各社からシュラウドの模型なども集めた。参加者の関心も東電の不祥事にあり、「東電の発電所が全部停止したときは正直言ってホッとした」、「シュラウドのひびが割れば治るといことは初めて知った」などの意見があった。

その他、プルサーマルや放射性廃棄物処理などの問題、新エネルギーや節電対策についてなど、さまざまな意見交換、幅広い議論がなされた。

参加者からは、「参加することから学ぶ姿勢が生まれることを知った」、「これからもホンネで話し合える場の提供をお願いしたい」といった声が多く、テーブルトークにたっぷり時間をかけたことが、参加者と WIN-Japan 会員の両者にとって満足度を高めたようであった。

この会の企画にたずさわりの、柏崎刈羽の女性たちがエネルギーや原子力のことを、いかに自分たちの生活と密着して考えているかを改めて実感した。◆

(わかい・なおこ 東京電力(株) 柏崎刈羽原子力発電所広報部企画広報グループ)

成であった。

私個人としては、リスク・コミュニケーションセンターのピンセント・コベロ博士の2時間半にもわたる講演が最も興味深かった。内容は、リスク・コミュニケーションには、科学的根拠のある手法があり、そして何よりも準備が大切だとか。ロールプレイングも用意され、会場はかなり盛り上がった。アメリカ人の演説のうまさは、陰にこうした手法が研究されていたのかと感心したり、言語や国情の違いで、そのまま日本にあてはまるものではないが、PA活動や地域住民へ理解を得る上で役に立つのでは?と思いながら、講演に引き込まれていった。「相手の質問に対し、何もコメントしない場合、85%の人はその人が何か悪いことを隠していると思う」という講演者の言葉が印象的であった。昨今、日本でも情報公開の重要性が問われている。情報公開とコミュニケーションのあり方は、原子力の理解促進、PA活動の信頼性につながることを改めて確信したのだった。

また、コミュニケーションのセッションでは、エンジニアであるアメリカ会員による原子力政策を左右する政治家へのアプローチ方法や、上院議員や政策グループとのコミュニケーションの方法についての講義もあった。日本女性との立場や国情にもよる格差を痛感させられた。

WIN-Japanの小川順子会長が、昨今の日本の原子力状況や、信頼回復のための原子力PA活動について紹介を行った。特に「地域住民への訪問活動」には、会場から質問が多数出された。その内容は、「訪問アポ



規制問題をテーマにしたパネルディスカッション風景

はとるのか?」、「訪問社員のトレーニングはどうしているのか?」など。海外の目からは「非常に特殊なPA活動」と映ったのだろうか?

今回の大会のハイライトは、各国の規制問題を論じるパネルディスカッションであった。日本から、松原純子原子力安全委員会委員長代理が登壇したのをはじめ、世界の規制分野で委員長レベルの要職にある4名の女性が、米国原子力規制委員会(NRC)のダイカス委員の司会のもとに、情報公開とセキュリティーのバランス、事故時の情報を世界規模で共有するための方策、原子力発電の将来等について語った。松原先生は、今、日本では東電問題が大きく取りざたされていること、原子力安全委員会の役割も変わり、透明性の大切さが増したことなどを発表された。どのパネリストも共通して、一般市民とのコミュニケーションの重要性を語っていた。

See You Next Year!

こうして、連日40℃に近い砂漠の大都市ラスベガスでの年次大会は

終わった。

日本以外の参加者は心なしか年齢層が高く感じられた。新会員獲得に苦勞しているという台湾の参加者から、「日本は若い方が揃ってうらやましい。あなた方若い世代に、これからがんばって欲しい」との暖かい言葉を受けた。

今回の大会参加で得た多くのものの中で、専門は違っても同じ分野に携わる日本からの参加者同士の情報交換や交流が、どれほど今回の出張を有意義なものにしてくれたかは図りしれない。また他国の情報を得て、自国の実情をより深く知ることができた機会でもあった。

私たちは参加者と来年の日本での再会を約束しつつ、WIPP(Waste Isolation Pilot Plant)見学のため、ニューメキシコ州カールスバッドへとラスベガスを後にした。

参加者それぞれが、友情や多くの収穫を得たように、私にも世界に向けてのネットワークが一本つながったようである。◆

[やのう・のりこ (財)電力中央研究所 ヒューマンファクター研究センター]